

宮崎先生との出会い

町 田 是 正

宮崎先生と私が初めて出会ったのは、昭和三十三年の日蓮宗教学大会の懇親会の場であった。仏教学・日蓮宗学とは疎遠であり、而も若輩だった私は末席で小さくなっていた。と突然、背後から「町田さんですね。貴方は珍らしい勉強をされていますね」と、声をかけられた。確かその当時、宮崎先生には、不受不施派の御研究に心魂を傾注されて、その学的業績が高く評価され、少壮学者の道を歩まれていた頃と記憶しています。四十年前の私は、中国法制史（中国農村慣習法）の勉強を某国立大学の史学評議委員会の指導を受けて続けていたが、勤務先の諸般の事情から週一度の上京する時間も許されなくなり、中国法制史の研究を放擲して学究意欲を喪失していた時でした。今にして思えば、四十年前、初対面ながら「心機一転して道を求めましょう」と、励まされたことで、私の学的意欲が喚起されたことは云うまでもありません。



宮崎先生には昭和六十一年十一月、勲四等旭日小綬章を受けられ、その叙勲祝賀会が、立正大学と身延山短大との共催で、十二月十日品川パシフィックホテルで盛大裡に開催された。各界代表五人の方々から祝詞が献じられました。が、どうした訳か、私が身延山学園教職員を代表して祝詞を述べさせられた。形式ばった表現は極力避け、専ら豪放磊落のお人柄と、多大の研究業績の一端に及びましたが、当夜、冷汗を流しながら祝詞を述べた想いがよみがえりま

す。

昭和六十三年十月三十日から十一月二日まで、日蓮宗々宝調査（山梨県内）が実施された。調査委員長の宮崎先生から「調査に参加同行されて御真蹟・先師の遺墨などを御覧になりませんか」と誘われて、立正大学の冠賢一・坂輪宣敬・松村寿庵の各委員先生方と楽しく有意義の四日間を共にさせて戴いた。

宗宝調査に同行して記憶に残っていることが一つあります。それは住職なり檀家総代が大事そうに持参して、宮崎先生に向って「○○ですが御鑑定をお願いし、お墨付が戴ければ幸いです」との申し出が再三でした。その都度、先生は明らかに偽物・作為物と解つていても「大変に結構なお品を拝見させて戴きました。どうぞ大切に保管して下さい」と、穏やかに柔和にお断りになられていた事でした。相手の心証を害しない御配慮に頭の下がる思いがしたものです。

私は平成四年八月三十日、身延山思親閣の別当職を辞して、気持も楽になって、九月一日から再び身延山学園に復職させて戴いた。大学に出勤すると、早々に学長室に呼ばれ、宮崎先生から「人は暇をもて余しては駄目です。忙がしい」と仕事に追われる事に人生の充実があります。ところで、町田さんは中国法制史とか西洋哲学を勉強されていましたが、他方、今までに日蓮教学に関しても研鑽をつまて論稿がたまっていると思ひます。どうです、此の際、一書にまとめてみる気持はありませんか」と、励ましのお言葉をいただいた。

そこで浅学をかえりみず、日蓮宗教学大会・日本仏教学会・国際東洋学会議・棲神・大崎学報などで発表した拙稿

を土台にして、全体として法華菩薩行の意義を考える内容を柱として、學術書の体裁ではなく、一般向の表現をもつて『日蓮聖人にみる宗教思想』と題し、拙稿八百五十枚の御披見をお願いした。宮崎先生はその場で直に推薦序文をお書き下され、而も東京の宝文館出版社まで斡旋の勞をとって下さいました。お蔭で平成五年四月小著発刊となり、出版社に迷惑がかからない程度に市販されているようです。



宮崎英修先生との出会い、思い出の記は尽きません。先生の久遠寺朝勤給仕のこと、本山清風寮御自室に於ける談論風発・四方山話・揺ぎない学究態度・歴史学者の厳しい批判精神・無欲恬澹で飾らないお人柄など。

私は若い頃は中国法制史の領域に没入し、日蓮教学とは無縁の異端児であった。この不肖の身が曲りなりにも、身延山学園に奉職させて戴き、併せて宗祖棲神身延山にも奉仕できますことは、善き教導者（八十六世藤井日静・八十七世望月日雄・八十九世竹下日康の歴代法主様・小林顕栄・望月日愷総務さま）に恵まれた事にもよりますが、願ひて四十年前、宮崎先生との最初の出会い、その後も折りにふれて御教示を賜ったことが、大きな比重を占めている事は確かです。

平成九年八月九日御遷化、宮崎英修先生・得珠院日漸上人に対して、御生前中のご鴻恩を深謝し、追悼の微意を識し衷心より増道損生をお祈り致します。（平成十年八月八日誌）

（仏教学部教授）